

令和7年の水稻における斑点米カメムシ類と斑点米の発生状況

水稻巡回調査圃場での斑点米カメムシ類(以下、カメムシ類)のすくい取り調査および普及センターの水稻定点調査圃場の調査米(以下、定点調査米)の斑点米等発生調査の結果をもとに、令和7年の水稻におけるカメムシ類と斑点米の発生状況についてまとめましたので、次作の参考にしてください。

[調査方法および結果の概要]

1. カメムシ類の発生状況調査(すくい取り調査)

巡回調査圃場57地点について、7月上旬～8月下旬まで調査した結果、7月上旬、7月下旬は斑点米カメムシ類の虫数は平年よりやや多い～多かったが、8月上旬、8月下旬は平年並であった。調査期間中、すくい取り虫数が最も多かったのは7月下旬で、種別にみるとイネカメムシが最も多く、また、県内全域で発生を確認した。7月上旬、8月上旬および8月下旬はクモヘリカメムシが最も多かった。

(令和7年9月30日発表 病害虫発生予報10月号p9-10防除所レポート参照)

2. 斑点米等の発生状況調査

定点調査米37点について、斑点米等の発生粒数を被害部位・種類別に調査した結果、精玄米1,000粒あたりの斑点米等の発生粒数は全県平均2.7粒で、過去11年中1位であった(図)。被害部位別では基部が49%と最も多く、次いで側部42%、頂部5%であった。地域別にみると、県北、鹿行および県南では側部(各71%、68%、56%)、県央および県西では基部(各63%、69%)が多かった(表)。

表 普及センター水稻定点調査圃場における斑点米等発生状況

地域〔圃場数〕	被害部位・種類における発生粒数(粒/精玄米1,000粒) ¹⁾				
	基部	側部 ²⁾	頂部	カメムシ黒点米 ³⁾	合計
県北〔4〕	0.5(24%) ⁴⁾	1.4(71%)	0(0%)	0.1(5%)	1.9
県央〔6〕	1.5(63%)	0.6(25%)	0.2(7%)	0.1(6%)	2.4
鹿行〔6〕	0.9(23%)	2.6(68%)	0.2(4%)	0.2(5%)	3.8
県南〔10〕	0.4(29%)	0.7(56%)	0.1(10%)	0.0(5%)	1.2
県西〔11〕	2.6(69%)	0.9(23%)	0.2(5%)	0.1(2%)	3.7
全県〔37〕	1.3(49%)	1.1(42%)	0.1(5%)	0.1(4%)	2.7

1) 数値は四捨五入しており、部位・種類別の計と合計が一致しないことがある。

2) 背部、腹部を含む。

3) 頂部被害とくさび状の裂開がみられるもの。

4) ()内の数値は部位・種類別の割合を示す。



基部被害

[考察]

斑点米カメムシ類が米を加害する部位は、クモヘリカメムシが側部、イネカメムシが基部、アカスジカスミカメは頂部であることが多いとされている。これに基づいてカメムシ類の加害種を地域別に推測すると、県北、鹿行および県南ではクモヘリカメムシ、県央および県西ではイネカメムシが優占していると考えられた。

県全体でみると、クモヘリカメムシとイネカメムシが優占しており、これらのカメムシ類は出穂期に粒を加害することで不稔を発生させ、減収の原因となることが知られている。圃場内のカメムシ類の種類を確認し、適期防除を行うことが重要である。

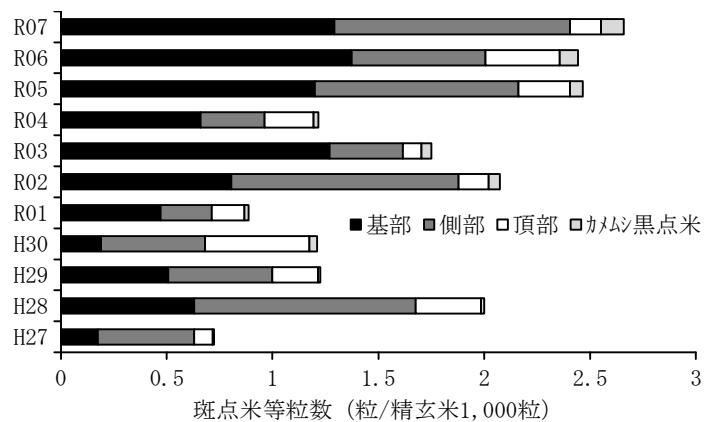


図 普及センター水稻定点調査圃場における斑点米等発生状況の年次推移